

イチゴ高設採苗用栽培装置を用いた効率的な苗生産

[要約] イチゴの高設採苗用栽培装置を用いて、秋期に低温処理した株を定植し、冬期に発生した子苗を親株として再度定植する二次増殖を行うことにより、翌年6月までに秋期に定植した株を約250倍に増殖できる。

園芸研究所・野菜花き部・野菜品種研究室

連絡先

092-922-4364

部会名	園 芸	専 門	栽 培	対 象	果菜類	分 類	普 及
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

[背景・ねらい]

イチゴの高設採苗は、従来の地床に比べて効率よく採苗できるが、10a当たり200株以上の親株が必要であるため、さらに効率的な増殖技術の開発が求められている。

そこで、高設栽培用容器と繊維の機能を活用した、かん水管理が容易なイチゴ高設採苗用栽培装置（平成11年度研究成果情報）を利用して、効率的にイチゴ苗が生産できる技術を開発する。

[成果の内容・特徴]

- 1．本ほ10a当たりの親株数は、二次増殖による効率的な苗生産では35株程度でよく、従来の高設採苗に比べ6分の1程度に減少できる。
- 2．一次増殖は、2 で約5週間低温処理した株を10月中旬に高設採苗用栽培装置に定植し、無加温施設内で管理すると、1月下旬までに1株当たり7株程度の子苗が発生する(表1)。
- 3．二次増殖は、一次増殖で1月下旬に発生した子苗を吸水シートで包み発根させた後、2月上旬に高設採苗用栽培装置に直接定植すると、1株から6月中旬までに35株程度の子苗が発生し、10月に定植した株からは約250倍に増殖できる(表2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1．二次増殖は、定植後の活着が悪いと欠株や生育不良株が多く発生するので、かん水ムラが生じないように水管理に注意する。

[ 具体的データ ]

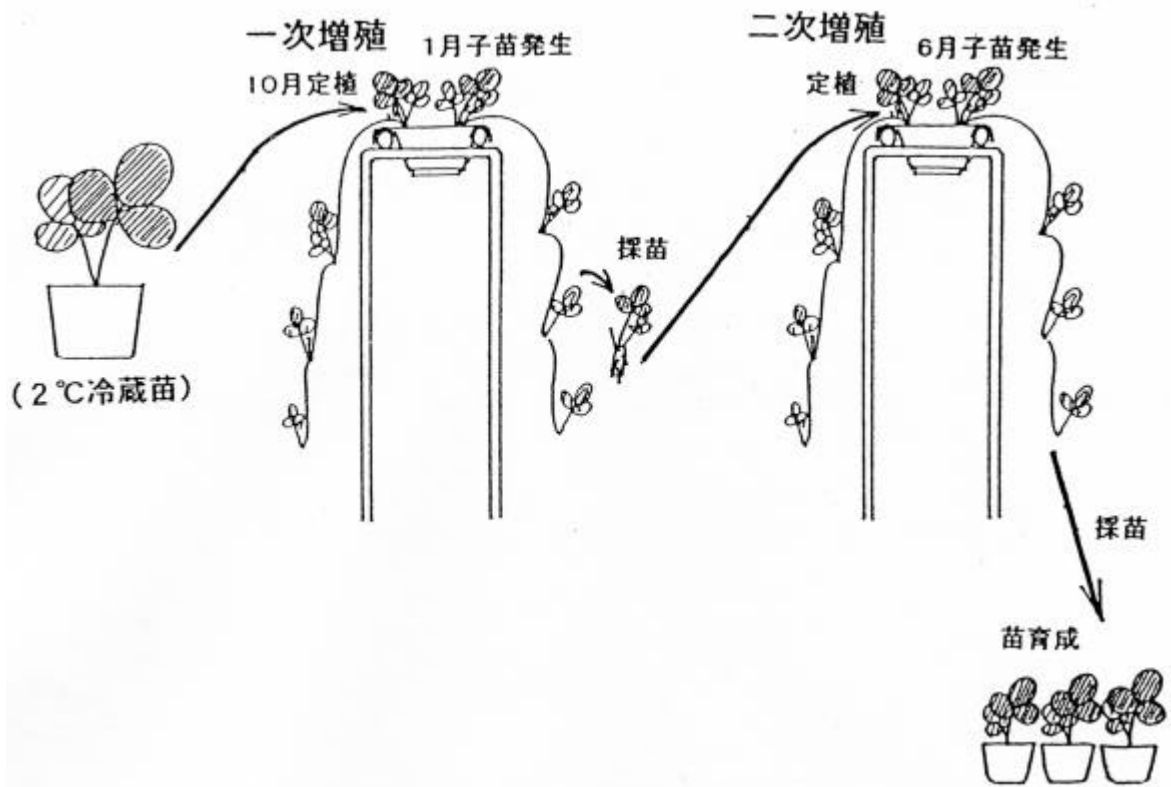


図1 イチゴ苗の二次増殖法

表1 一次増殖での親株1株当たり子苗発生数(平成11年)

低温処理	とよのか			さちのか		
	1/14	1/31	2/10	1/14	1/31	2/10
処理	5.5	6.8	9.0	8.3	10.3	12.4
無処理	1.9	2.2	1.6	0.6	0.6	0.6

注) 1. 低温処理: 9月11日から10月14日まで2°Cで冷蔵 2. 定植日: 10月14日  
 3. 栽培管理: 無加温ガラス温室・冬期夜間保温 培養液OK-F-1(N-P-K=15-8-17)1,500倍

表2 二次増殖での親株1株当たり子苗発生数(平成12年)

定植日	とよのか			さちのか		
	5/9	5/25	6/13	5/9	5/25	6/13
1月29日	8.7	19.7	34.5	13.8	24.3	43.4
2月9日	8.7	19.4	35.0	8.6	17.6	40.0
2月18日	5.2	12.4	26.4	6.8	16.4	35.0

注) 1. 定植: 一次増殖子苗に吸水シートを付け発根促進後、採苗し直接定植  
 2. 定植日: 平成12年1月29日、2月9日、2月18日  
 3. 栽培管理: 無加温ガラス温室・冬期夜間保温 培養液 OK-F-1 1,500~2,500倍

[ その他 ]

研究課題名: 新養液栽培方式によるイチゴの超効率的苗生産技術の開発

予算区分: 県特

研究期間: 平成11年度(平成10~11年)

研究担当者: 藤田幸一、三井寿一、末吉孝行、伏原肇

発表論文等: 平成10、11年度 園芸研究所 野菜花き部 野菜試験成績書